

祇園閣について

2023.6.19 村上勝彦

祇園閣は、明治・大正期の大実業家、大倉喜八郎が京都別邸の隣に建てた記念塔で、竣工時期は諸説ありますが、昭和2年（1927年）12月が有力です。70年後に当たる平成9年（1997年）、国の登録有形文化財に登録されています。京都別邸及び祇園閣は、当時、東京帝国大学工科大学教授で著名な建築家・建築史家である伊東忠太による設計で、大倉土木株式会社の施工で造られました。同社は創業者が大倉で、現在の大成建設株式会社にあたります。

祇園閣の下層及び基礎部分は鉄筋コンクリート造り、中層以上は鉄骨鉄筋コンクリート造り、屋根は銅板葺きで、総高34m、建築面積67㎡の3階建てで、京都祇園祭の山鉦をかたどった外観から祇園閣と名づけられました。鉦を象った屋根の尖頂と、正面入口の銅扉の左右に施された鶴は、大倉の幼名の鶴吉、また雅号の和歌廼門鶴彦（わかのとつるひこ）にちなむものです。

大倉は大正15年（1926年）、ほぼ同じ時期に、関東大震災で焼失した東京赤坂の美術館、大倉集古館の再建を委嘱していた伊東に、老後保養のための別邸を京都祇園町、通称真葛ヶ原に建てることも頼みました。建物の設計にあたっては、大変興味深いいきさつがあります。風雨の烈しいある日、大倉はさしていた傘が風にまかれて漏斗状に上向きに反転したのを見て、その形が面白いと思い、忘れ難いものとなります。彼が18歳で江戸に出る前の故郷の越後新発田にいたときともいわれますが、はっきりしません。祇園閣を建てる時、そのことを思い出し、建物の外観を是非、そのような形に設計して欲しいと伊東に頼みます。

伊東は、生まれて初めてこのような奇抜な注文を受けたと驚き、無理とは思いつつも幾つか案を作って大倉に見せたところ、大倉もやはり駄目かといって諦めます。確かに、伊東の設計構想スケッチの野帳の中には、逆さになった洋傘の絵が描かれています。しかしその後ほどなくして、今度は祇園祭の山鉦の形の建物を造って貰いたい、京都の全市を一瞬の下に見渡せる高い楼閣にし、公開もして京都名所の一つにしたい、それを自分の記念事業の一つとしたいといいます。伊東もそれなら可能と思い、応じました。死ぬまで活動をやめないと公言していた大倉らしい考えで、単なる老後の隠居所ではなかったのです。祇園閣は京都別邸の建設と同時に行われ、大倉の90歳を記念して造られたともいわれます。

建物の正面入口の上には西園寺公望筆の「祇園閣」の文字が、上層の正面には大倉喜八郎筆の「万物生光輝」の文字が掲げられ、正面の階段の袖石の上には一対の狛犬がのっています。狛犬を載せたのは大倉の希望によりますが、それにも面白いエピソードがあります。伊東が高さ二尺あまりの狛犬の原型を造って大倉に見せたところ、大倉は、「こんな小さなものは大嫌いだ。見上げるような大きなものでなければならない。狛犬

も普通の型ではいけない。ウンと胸を張った、筋肉の十分に発育したのが好い。」といい、結局、そのようなものになりました。

大倉は祇園閣の建設工事中、数回現場を視察し、色々と批評や注文をし、竣工を楽しみにしていましたが、病気となり、開閣式を行えないまま、竣工翌年の昭和3年（1928年）4月、享年92（数え歳）で亡くなります。

京都別邸及び祇園閣の建設を思い立った大正15年（1926年）の5年前、大倉と並び立つ大実業家の安田善次郎が暗殺されるという事件がおこります。20歳前後の大倉が江戸で丁稚奉公していたおり、1歳年下の安田も別の店で丁稚奉公をしており、二人はそのとき顔見知りとなり、その後、共に実業家として親しく付き合っていました。そのため大倉は京都別邸を造るとき、その暗殺事件を思い、密かに脱出用の地下トンネルをつくったという噂話があります。しかし実際には地下トンネルはなく、別邸の隣に建つ祇園閣の一層の部分に、身を潜められるような所があり、それかもしれないと思われま

す。また大倉が、「京都には金閣、銀閣はあるが銅閣はない、銅閣をつくって新たな京都の名所にしたい、祇園閣を通称、銅閣とする」といったという噂話もあり、いかにも大倉らしい考え方で、確かに祇園閣の屋根は銅板葺きになっていますが、現在のところ、大倉がそのようにいったという確証はありません。

参考文献 鶴友会編・刊『鶴翁餘影』昭和4年（1929年）

鈴木博之編著『伊東忠太を知っていますか』王国社、平成15年（2003年）